

「いのち」きらめく恵みの湖を、 未来の子どもたちに伝えるために

遠い日に遊んだふるさとの川には限りない「いのち」があふれていた。

新しい季節を告げる澄んだ風がどこまでも広がるヨシ原を吹き抜けていった。

もう一度、あのかげがえのない自然と手をつなぎ、心と心を結ぶことで呼び戻したい。

ふるさとを愛してやまない一人ひとりの想いがひとつになったとき、その協議会は生まれた。

今回の巻頭特集は設立準備から数年を経て多彩な活動の輪を広げ続ける

東近江水環境自治協議会をクローズアップした。



丹波 道明氏



西川 嘉廣氏



山岡 完右氏

東近江水環境自治協議会会長	丹波 道明氏
東近江水環境自治協議会副会長	西川 嘉廣氏
淡海環境保全財団副理事長	山岡 完右氏

まず、東近江水環境自治協議会の設立の目的を、会長のほうからお話しいただければと思います。

丹波 琵琶湖にはいちばん大きな西の湖と呼んでいる内湖があります。昔は琵琶湖の周辺に随分多くの内湖があつて、これが琵琶湖に対して環境保全の役割を果たしていました。いちばん大きな役目はやはり水の浄化。上流から流れてくる水を浄化して湖の中へ流し込むという役割です。次に琵琶湖の固有種、いろんな魚類の産卵・ふ化場所としての役目も担っていました。それが、戦争中から戦後にかけての食糧不足でどんどん干拓が進んだわけです。干拓が進むと水辺や内湖がかえりみられなくなって水が汚れるままになっていきました。私の子どもの頃には、ほんとうに豊かな命がありました。特に魚や貝ですね。実に多くの魚が泳いでいました。足元を見れば、貝類もいっぱいでした。ところが、サラリーマン生活を終えてふるさとへ帰ってくると、もう見る影もない状態です。これまでと景色はさほど変わらないけれど、水の汚濁は非常に顕著でした。これは大変なことだと危機感を持ちました。そんな時に、近江八幡と安土の行政の方々が、長命寺湾・西の湖環境保全協議会をつくり、西の湖の自然観察会、長命寺湾の自然観察会、さらに西の湖へ注ぎ込む各河川を上流までさかのぼって、現状を把握する観察会を何度も開かれたので、これに参加したわけです。やがて、参加したメンバ

ーの中から設立準備委員が選ばれました。平成十一年の十一月のことです。その後、毎月一回、計九回の設立準備会を開いて、真剣に議論を重ねました。その結果、西の湖と西の湖から流れ出る長命寺川、北之庄沢を経て八幡堀から長命寺湾に流れ出る二つの流れの内水域をただ単にきれいにするだけでは不十分で、上流にさかのぼって森も美しくなければ川も生きてこない、湖も死んでしまう。森と湖ともつ切り離せない存在なのだという認識をメンバー全員が持ちました。それで名前をですね、当初は長命寺湾・西の湖環境保全協議会を想定していたわけですが、東近江全体の水域を視野に入れるということで、現在の名称になりました。平成十二年の七月のことです。

西川 先生は副会長をお務めになつてるわけですけど、同じように設立の時に参加されて、その時のお気持ちなり、ご自身のお考えなり、それをお聞かせいただけますか。

西川 私はずっと大学におりまして、こういう問題にはそれまで疎いというか、関心がないというか、そういう状態でした。しかし、私の定年が迫つてる頃に準備委員会がありまして、私もルーツは近江八幡で、代々近江八幡に先祖が住んでましたので、声をかけていただきました。それならばということに加えてもらったよつなわけです。何の役にも立たない唯一の理事です(笑)。

丹波 そんなことないんですよ。ものすごい博識で、実に面白い先生です。

十三夜の名月の日に
多数の外国の方々を「ヨシの国」へ

この会が発足準備から数年が経つてるかと思いますが、主だった活動内容あるいは非常に反応のあつた事業などを少し聞かせていただけますか。

丹波 まず、子どもを西の湖に引つ張り出さうという活動を元漁師の会員の方が試みておられましたので、これをバックアップすることにしました。発足の翌月のことです。その後、湖沼会議のプレ会議という位置づけで、十一月「リビングレイクス2000」に参加された外国の方々のサポートを私たちの会でできないかという依頼を受け、快諾しました。全員で「ああでもない、こうでもない」と相談しながら進めました。迎えるのは午後三時頃から夕方にかけてだったので、月令はどうかといったことも調べた記憶

があります。当時、残念ながら西川先生のヨシ博物館ができていなかったもので、「円山の船着場から直接船に乗っていたら、西の湖をご案内しながら、湖の状況やヨシの現状を見ていただく」ということで意見がまとまりました。夕刻に、ちよつと十三夜の名月が生まれて、なかなか素晴らしい演出になりました。集落の案内も計画に入っておりまして、街灯のない場所には手づくりのぼんぼり

丹波 道明氏



を灯し、ご案内しました。

まさに会をあげての手づくり企画ですね。外国の方は何名ほどだったのですか。丹波 五十五名お見えでした。大歓迎になったわけです。おばあちゃんが出てきて通訳さんをつかまえて「私、もう九十越えとるんよと言ってくれ」なんてね。外国の方が「ほーっ」と感嘆されると、「感心してくれはった！」なんて後々まで嬉しそうでした。それからお寺の方にもご案内して見ていただきました。言葉は通じなくても、心から解り合えたという実感があります。それから、雅楽も聞いていただきました。帰りはですね、篝火の中を舟と車で宿舎へ帰っていただきました。これも、非常に感激していただきましたよ。これが、発足した年のいちばん印象深い行事になりました。西川 いまお話に出ました篝火も、間伐材を燃やしたものです。環境保全の一環というわけです。

外国人の方々はいずれも環境の問題についてテーマを持って日本に来られたと思います。ご意見などは出しましたが。丹波 いろいろお聞きした中では、なぜヨシに我々がこだわっているのかということがよく解ったという感想が印象に残りました。これまでの会議でもヨシの話が度々出たわけですが、もう一つ実感として理解できなかったのが、今回の催しで納得できたというわけです。

西川 あの時、困ったのは、通訳者が足りないということでした。私が乗った船は、たまたま通訳がおられなかった。聞かれるままにお答えしましたが、どこまで満足していただけたか、心もとない感じがしました。特に熱心に聞いておられたのはポルトガルの女性の方でした。日本ほど外国では生活の用具・素材としてヨシは活用していないと思うんですね。ところが、日本に来てヨシがいるんな生活の現実の場で使われてきたことに非常に関心をお持ちでした。日本人よりも興味をお持ちといった感じでした。

丹波 皆さんも住民組織の代表としてお見えになりましたので、余計に波長が合ったんじゃないかと思えますね。その後、こちらから事務局のあるドイツを訪ねる機会を得て訪れた人たちが、大歓迎を受けました。ベンツの工場を見学したり、国境の近くにある湖を探訪したりしました。「この前は船に乗せていただいたので、今度はこちらの船で周遊していただきます」ということでした。あの催事がきっかけで、さらに交流を深めることができました。

ヨシ保全を図る財団として
私たちもできる限りのお手伝いを

山岡さんはこのような活動を、当初からご覧になってると思いますが、協議会に関する感想をちょっとお聞かせいただけますか。

山岡 私もこの仕事をさせてもらう以前は行政の方で琵琶湖の総合保全の計画づくりに、初期の段階から携わっておりました。現在、進められている「マザーレイク21計画」です。そのような中で水道のようなハード面は着実に整備しているわけなのですが、やはり最後に残るのは、その周辺に住んでおられる住民の方々が生活をどのように見直していくか。かつてどのように取り組み、どんな暮らしぶりであったかを再考していただくといった点にたどり着くわけです。「マザーレイク21計画」を推進する上でも、特に住民の方々、流域単位での取り組みが重要になってきます。その一つとして、東近江でこのように活動をしていただいているわけです。流域というのは山の上流・中流・下流、そして最後は琵琶湖がすべて引き受けて、その処理をしなければならぬわけですが、途中の段階で流域の方々の取り組みが積極的に進んでいけば、限りなく昔の状態に立ち返ることができるはず。同様に、東近江の場合も近江八幡と安土、西の湖周辺だけではなく、流域の八日市などすべての地域が参画していく必要があります。ただ、現実的には上流と下流の問題ですので、なかなかむずかしい問題があるわけです。たとえば、大阪湾と琵琶湖との関係と同じです。どうしても、上流の問題にされがちなのです。協議会の場合も、はじめは八日市さんも参画されて



西の湖自然観察会

れた出発点にあるのではと思います。県にも琵琶湖のヨシ群落の保全ということに着目してヨシ群落の保全条例がございませう。その保全条例に基づく琵琶湖のヨシ群落の維持管理や刈り取りを、メインの仕事にしているのが私どもの財団です。西の湖は私有地のヨシではございませうが、同じ立場で琵琶湖を守るためにヨシ群落の保全ということについて、それをメインに据えながらお取り組みいただければと願っております。メンバーも増えてきてるようですし、取り組みも身近な事から多彩に行っていたら、県が考えているような方向に沿って一つの活動として広がっていくことを大いに期待いたしております。

丹波 竹田勝博さんという「ヨシ刈りボランティア」の先駆者で、過去十年間このボランティアを続けておられる方がいます。その「ヨシ刈りボランティア」を会員でもっと大々的にバックアップしていただくということで、平成十三年度は、二月の十一日に「西の湖宝探し」を実施しました。みんなで「宝物」を見つけてくださいという企画です。それは風の音、波の音、ヨシの匂い……といったものです。そのよつな「宝物」を探していただくことで、関心を高めていくという試みです。また、西川先生にお話をしていただき、九州からはヨシベン画家の諸藤先生をお招きして絵を教えてください、かわらみユーシアムの館長の菊井さんにヨシ笛を吹いていただいたりしました。子どもた



ヨシ刈りボランティア

ちを集めてヨシ昔なんかも築きました。みんな実にも楽しそうでした。ヨシ刈りをした後は、おにぎりとお汁と漬物を食べながら、全員で水のことやヨシのことを話し合いました。

実際に面白そうな企画ですね。お話を聞いて聞いているだけで、風の音やヨシ笛の音色、子どもたちの元気はつらつな表情が目に見えたりする感じがします。そ

の年、他にも興味深い催しがあったようですが…。

丹波 会の活動に火をつけようとか何か大きなことをやろうと話合い、三部構成の「流域フォーラム」という催事を六月に開催しました。テーマは「いのち」です。第一部は、地域に呼びかけて「ヨシ笛アンサンブル」を結成し、その演奏を行いました。第二部では、滋賀県立大学前学長の日高先生、京都精華大学の嘉田先生、そして狂言師の木村先生の鼎談をしていただきました。さらに第三部では、狂言の木村先生にお願いして創作いただいた環境創作狂言「琵琶の湖」も上演しました。かなりの予算が必要でしたが、全員で頑張ってチケットを売り、助成金なども得て、なんとかやりくりしました。その時、実感したのは五、六名でもよいから、ほんとうに一生涯懸命やろうとする者が集まれば、かなりのことが実現できるということでした。これは、大きな自信になりました。私たちの大きな心の財産です。グループもこれによって活気づき、結束も深まりました。

西川先生がおはじめになった「ヨシ文化話会」について少しお話を聞きたいのですが、具体的にどのようなことをしておられるのですか。

西川 その都度、私が勝手にテーマと言いますか、内容を決めてやっております。平均月一回ですね。不定期なんですけれども、たとえば「ヨシと食文化」「ヨシ



と音楽」「ヨシにちなんだ諺・故事」「ヨシと紋様」「ヨシと万葉集」「ヨシと童話」「ヨシと舟」「ヨシと料理」「ヨシと生活デザイン」といった具合に、いろいろとお話をしてまいりました。幸い、長く続いております。毎回、テーマが異なるので、関心をお持ちの方が来られるわけです。昨年のクリスマススイブには「ヨシと音楽」と題してヨシにちなんだ音楽会を催しました。その時は六十名ほどお集

まりいただきました。いわば、スペシャル版ですね。我が会の忘年会も兼ねての企画です(笑)。ソプラノ歌手の方にもお越しいただいて非常に盛況でした。二十数曲ご披露しました。それこそ、クラシックからシャンソン、歌曲、演歌、雅楽まできわめて多彩です。ヨシに因んだ曲は予想をはるかに越えるほどあります。歴史があるから、それが文化に反映されるわけです。たとえば、「早春譜」。それから「慌て床屋」にも出てきますね。これらは日本の典型的な歌曲ですから、外国に目を移せば、ドイツ歌曲にもヨシが登場します。たとえば、「葦の歌」なんていうのにもあります。楽器でもフアゴット、クラリネット、オーボエ、サクソフォン…これはいずれも、現在もヨシの差し込みで吹く。ですから、クラリネット協奏曲はヨシに関係ありと、こうなるんですね。このようにして選んでいくと実に数多くあるわけです。調べていくと、面白いですよ。

これは、知りませんでした。なるほど



ヨシ舟作り



すごいですね。歴史があるから音楽という文化と交響していくわけですね。それにしても、よく調べておられますね。山岡 それは、なんといつてもヨシ博物館の館長をしておられるわけですから詳しいですよ(笑)。でも、こうしてお聞きするとほんとうに興味深いですね。ヨシには昔から永い時の流れの中で培われた文化があることを実感します。

現在、ヨシの需要は全国的に皆無に近い状態

ヨシについては、去年も取材させていただき、本誌でもご紹介しましたが、まだご存じない方々もおられると思います

ので、もう一度、ヨシの現状などについてお聞かせいただけますか。
西川 まあ、山岡さんが同席されているのに、私が申し上げるのもなんですが、ビジネスの視点から見れば、もう絶滅しているといっても過言ではありません。我が家の代々の家業でしたから、特にこのようなボジションでお話するわけですが、全国的にもう需要がほぼ皆無なのです。一つには日本人の生活様式が変わったのが原因です。もう一つは中国などからとても日本の人件費では太刀打ちできない安価な商品が入ってくることです。たとえば、昔からの大きな需要といえば、屋根葺きの材料があります。ところが、これも建築基準法二十二条によって、火災の危険があるということでもまず許可が下りない。もう一つは、^{すたれ}簾・^{ついで}衝立・^{しょうじ}障子などの伝統的な家屋のインテリアですが、これも需要がほとんどありません。一方、滋賀県ではヨシを増やそうとしています。役に立たない、使えないモノを増やそうとする。これは、なぜなの



西川 嘉廣氏

かというところ、需要そのものはないけれど、ヨシにはさまざまな優れた機能があり、これが明確になりつつあるからです。
ヨシの優れた機能とは具体的にどのようなものですか。私たちにも解るように易しく教えていただけますか。
西川 大きく分けて四つです。水質浄化、生態系保全、景観形成、そして浸食防止。まあ、現在、世界で言われているのを大雑把に言うとその四つです。その四つの機能があることが世界中で認められるようになってヨシを増やそうということになったわけですね。ただし、問題なのは増やした場合、刈り取りをしないと駄目なんです。これには人件費が要る。人件費に釣り合う需要がなければ、民間では増やしたくても増やせない。これが現状です。矛盾が生じているわけです。事態はほとんど硬直しています。付加価値の高い伝統的用途に替わる新規用途が未だ開発されていない。僅かに利用されているのはヨシ紙と腐葉土だと思っております



が、ヨシ紙については木材から作る紙に比べて値段がべらぼうに高くなる。腐葉土についても人件費に見合う価格で売れるとは到底思えない。やはり、このような問題は民間の一企業だけでは荷が重過ぎるわけで、財団のような公的な組織が積極的に動かないと、息切れを起こして続かない。新しい生活デザインに結びついた大量需要を探り当てる必要があります。幸いなことに、現在、大学の若い学生たちが関心を持ちはじめきており、さまざまなアイディア会議を開いて、「こんな用途はどうだろう」といった具合に活発に動きはじめています。自発的な研究としてやってくれてる。その中から思いがけないモノが飛び出す可能性に期待を寄せているといった状況です。

山岡 いま、西川先生が指摘されたヨシの機能にあらためて注目して、保全条例をつくり、少しでも増やそうと刈り取りを行っていません。しかし、確かに大量に商品化して捌けるような需要は残念ながらありません。そのあたりで、先生がおっしゃったように、さまざまな所で何とかそれを商品化して採算が合う形に持つていこうと努力もされています。そういうことにも期待をしながら、私たちも財団としての役割を重く受け止め、たとえば、民間では手を出しにくいというか、出せない所については私どもで刈り取りを考えています。私どもは腐葉土と紙が中心ですので、腐葉土については全国各地のしかるべき所へサンプルを送ったり

しております。菊に良いという宣伝文句も入れて…。実際、非常に効果はあるのですが、まだ、一般的には定着していません。やはり、安価なものをお求めになるわけです。

西川 私の家には、腐葉土が商品として注目される以前からヨシの捨て場に腐葉土をもらいに来る方がおられます。菊づくりの肥料にされるわけです。全国の品評会で優勝しておられるような愛好家です。昔からヨシの腐葉土が菊作りに不可欠だったので。ちなみに、最近ではトラックで、どつさりを持っていかれる方もあります(笑)。話は変わりますが、この頃、甲虫なんかは非常に貴重でしよう。デパートなんかでも実に高額で売られている。ヨシの捨て場では、非常にこの繁殖が良いのです。だから、甲虫あたりを育てるのも面白いのではと半分本気で考えています(笑)。

ヨシを生かす研究の先進国はドイツ 環境改善の大きな糸口に

ヨシと環境の問題に戻りますが、世界的にはどのような動きがあるのでしょうか。日本よりも進んでいるのですか。西川 先進地はドイツです。そして、ヨーロッパの先進十カ国がドイツに学んで十年間のヨシによる水質浄化のプロジェクトを行いました。準備段階はすでに終わっており、ヨシが汚濁を改善するのは間違いないという結論を出しています。

現在は、なぜそうなるのかといメカニズムの解明に取り組んでいます。たとえば、ヨシを使った浄水設備の構造をどうすれば、効率が高くなるのか。水を縦方向に流すのか、水平または階段式か。水を流す時の汚濁の程度と水流の速度は…といった研究に発展しています。たとえば、ポーデン湖がヨシの問題についていちばんの先進事例になると思います。この湖はスイス・オーストリア・ドイツにまたがっており、国際協調の上でやっています。面積は琵琶湖の八割で、ほぼ似ています。ドイツなどでも失敗は何回も繰り返しています。でも、それはすでに計算済なのです。失敗が生じるのは当然という考え方です。むしろ、失敗こそがもっとも良い参考になるという発想です。琵琶湖でもヨシ条例で、十年間で三十ヘクタールを植栽しようとしたのが、目標値の三分の一に終わりました。しかし、そ

の方法論の検討、努力や過程が世界にとっては貴重な参考資料になるのです。丹波 水問題が中心なのは当然ですが、その上に、いま問題になってます地球温暖化、二酸化炭素の吸収についても大きな役割を果たしているということが、明確に証明できればと期待しています。ヨシの生命力は抜群です。わずか一日で五センチ前後も成長します。これが水中の窒素・リンだけでなく、二酸化炭素を吸収して伸びていく。西川 その通りだと思います。ヨシというのは植物のグローバルな分布から言えば、いちばん広範に分布している、それだけ生命力がすごいわけです。これを本気になって巧みに活用すれば、現在の世界が抱えてい深刻な環境問題を大きく改

善する糸口になるはずですが。

第一次産業に従事する人々に使命感を背景にした揺るぎない誇りを

丹波 ヨシの需要は全国的に皆無に近い状況という話が出ましたが、川を遡って上流域の山へ行きますと日本の木材もまたヨシに近い状況にあります。環境問題を抜きにして経済問題だけを考えると、わが国の森林もまた競争力を失っているのです。ヨシ原を守る人に跡継ぎもなく放置されています。中流域の水田稲作もまた同じ道をたどりつつあるように思います。

わが国の原点は「いのち」満ちあふれる「豊葦原瑞穂国」です。いまやこの原点が病んでいます。私たちの東近江水環



境自治協議会は、西の湖を中心とした安土から近江八幡にかけての内水域の水の浄化と景観の美化を活動の中心に据えつつ、川をつたって鈴鹿の山までそれぞれの地域で環境に取り組んでおられる方々と手を組んで、さらには琵琶湖から淀川を視野に入れ、この「病氣」の治療に取り組みたいと考えています。互いの小さな輪を重ね広げていくことが何よりも重要なのです。

環境問題というのは、すなわち私たち一人ひとりの自分の問題なのです。結局、暮らして仕事の在り方を変えて行かないと環境問題は解決しない。しかもそれを急がないと駄目なんです。ところが、やっぱり便利さや経済といった現実にはなかなか勝てないわけですね。そこで、ビジネスの中でいちばんへたり込んでる所はどこだろうと見てくると、やはり第一次産業です。たとえば、山の暮らしが成り立つようにしていかなければだめなわけです。そのためには山を守る人に対して守り賃を出さなきゃいけない。現在、すでに多くの人々が山を離れてしまっていますが、なんとかして山を守り育てる専門家を育てないと山を保護する技術の伝承が途切れてしまいます。また、滋賀県の田畑の九六%までは兼業農家です。県下には働ける場所が数多くありますので、そこへ行って働かれるわけですが、そうしているうちにその収入のほうが大きくなる。勢い軸足がそちらへ移る。東近江全体の、多くの林業者・農業者の

方々に集まっていたら、これからの生活をどうしたら良いか、これからのビジネスをどうしていくのか、いうことを互いに考えてみたいのです。

たとえば、ヨシ原の保全についても同様です。ヨシ原をナシヨナルトラストといたかたちで買い上げていただく。それを、若い人々も含むボランティアで保全していく。または、専門的に守ってくれる人々や組織を生み出していく。それが誇りに感じられる仕事にしていき、保全を図るわけです。

東近江水環境自治協議会としての今後の活動のテーマや具体的な施策などを、いまあらためてお聞かせいただけますか。第一次産業分野の重視、地域アジェンダづくりなど、いくつかの明確な指針があるようですが、そのあたりのことを

丹波 そういことですが、私たちの協議会の原点は二つあります。一つはヨシの保全。もう一つは、西の湖の水質・景観の保護です。この二点を協議会の核として、私たちは活動を広げ、上流域に遡っていきたいと思っています。繰り返しになりますが、個々では成し得ないことも相互に結び力を合わせれば、できなかつたこともできるようなのです。その意味でも、私たちの活動はこれからであると考えています。先の目標を達成するためには、いまも申し上げたように、第一次産業の分野に取り組みの重点を置く必要

があります。水とのかかわりがきわめて大きな産業であり、治山・治水に直接影響する仕事だからです。温故知新の視点を大切に次代に向けた仕事と暮らしのビジョンを地域に根差した討議の中から見出していかなければなりません。農業も林業もきわめて高度で総合的な知識と技術が要求される分野なのです。自然との共生を考える時、その最前線に立っているのがこれらの仕事に従事する人々であるといっても過言ではありません。昔の言葉で言えば百姓ですが、つまり「百の匠」がいま、まさに求められていると実感しています。また、点から線へ、線から面へと活動を拡大していくために地域アジェンダづくりは非常に重要です。その一環として東近江環境保全ネットワーク参加グループ、東近江地域振興局、セブンドロップス、琵琶湖市民研究所などとの連携強化も図っています。共催イベント、ワークショップ、フォーラムなども検討中です。さらに協議会として来年度開催の「第3回世界水フォーラム」に地元NPOとしても参画を予定しています。

山岡 今後どのように展開されるかという点についても、私も財団の立場でも、同じくヨシ保全を図る仲間ということでございますので、大変関心を持っておりまます。また、同じ立場で何か協力さしていただけることがあれば、ぜひお手伝いさせていただきますと思っています。